

『源氏狭衣歌合』の考察 ～飛鳥井と夕顔・浮舟の番から～

A study of “Genji Sagoromo Utaawase” ～In case of ‘Asukai and Yugao,Ukifune’～

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学

山 本 美 紀

Miki Yamamoto

はじめに

『源氏狭衣歌合』は、藤原定家によって創られた文学作品である。『物語二百番歌合』の前半部にあたり、『源氏物語』と『狭衣物語』の作品中からそれぞれ歌を選び、左に『源氏物語』の歌、右に『狭衣物語』の歌を、それぞれ歌の背景がわかる詞書と作者名を配して番え¹、100番200首から構成されている。『歌合』でありながら、その他の歌合、例えば、『六百番歌合』や『千五百番歌合』とは形態を異としており、2つの物語の秀歌撰と言ったほうが内容に即していると思われる²。

『源氏物語』と『狭衣物語』は共に、平安時代を代表する物語である。藤原定家の姪にあたる藤原俊成女が残した『無名草子』には、

『狭衣』こそ、『源氏』に次ぎてはようおぼえ侍れ。(58頁)³

とあり、その評価が高かったことがうかがえる。

しかし、多くの平安後期物語がそうであったように、かつては『狭衣物語』は『源氏物語』の模倣であるという考えが定着しており、そこに視点を置いた研究が多くあった。実際、『狭衣物語』は『源氏物語』を意識していることは疑いようがない。主人公である狭衣は、『源氏物語』の主人公、光源氏や薫に酷似しており、その思い人である藤壺中宮と似た、源氏の宮なる人物も『狭衣物語』には登場する。

また、本文の模倣も数多く指摘される。以下は、『源氏物語』と『狭衣物語』で類似する場面の一例である。

猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長くつきたりけるを、物にひきかけまつはれにける

を、逃げむとひこじろふほどに、御簾のそばいとあらはに引き上げられたるをとみに引きなほす人もなし。(中略)わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いとかうばしくてらうたげにうちなくもなつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや。(若菜上・140頁)⁴

御側に寝入りたる猫、鳴き出でて、端ざまへ出づる、綱に御几帳の帷子の引き上げられて、見合せたまへば、(中略)猫を「こちや」とのたまへば、らうたげなる声にうち鳴きて、近く寄り来たる、御衣の移り香うらやましようて、かき寄せたまへれば、御袖より入らんと睦るる、いとうつくし。(巻3・137頁)⁵

『源氏物語』では、柏木が思慕する女三の宮を垣間見る有名な場面であり、ここから柏木の恋は熱情を持って進行していくのだが、それと同じように『狭衣物語』でも源氏の宮への報われぬ思いに狭衣は苦悩する。このように、『狭衣物語』を理解する上で『源氏物語』は切り離せないものとなっている。

しかし、『狭衣物語』がただの『源氏物語』の模倣であったならば、定家はこの2つの作品の歌を番えたりなどするであろうか。定家が、特に文学については妥協を好まないことは『明月記』などからも明らかであり、であれば、その定家が撰ぶに足る魅力が『源氏物語』と『狭衣物語』にはあったと推測される。その魅力を探るべく、今回は、『源氏狭衣歌合』の組み合わせの中で2番目に多い飛鳥井と夕顔・浮舟の番を比較し、そこから彼女たちの番が多い理由について考えてみたい⁶。

I 飛鳥井と夕顔・浮舟

本題に入る前に、飛鳥井と夕顔・浮舟の共通点について、簡単に触れておこう。とは言え、夕顔と浮舟は同一人物ではないため、3者を同時に比較することはできない。そのため、飛鳥井と夕顔、飛鳥井と浮舟という組み合わせで考えてみたい。

まず飛鳥井と夕顔の共通点であるが、身分が低く、両親が他界している点、愛する男性の子を身ごもりながらも引き離されてしまう点、素性を明かさない点などが挙げられる。特に、素性がわからないという点はポイントのようで、そのミステリアスな部分が男君を引き付けていたようである。以下に挙げるのは、男君が女君に惹かれていく場面を描いたシーンである。

・・・人目を思して隔ておきたまふ夜な夜ななどは、いと忍びがたく苦しきまで思ほえたまへば、なほ誰となくて二条院に迎へてん、もし聞こえありて、便なかるべきことなりとも、さるべきこそは、わが心ながら、いとかく人にしむことはなきをいかなる契りにかはありけん、など思ほしよる。(夕顔・154頁)

中将の君は、見慣れたまふままにあはれ増さりつつ、なほざりごとにはあらず、行く末まで契り語らひたまふべし。さるは、これに劣る人も見給はず、我が御心にも、このことの、人に優れてめでたきなど、わざと思すべきことにもあらねど、これやげに宿世といふものならん、あはれとのみ思さるれば、待たる宵々なく、紛れ歩きたまふ。（巻1・88頁）

光源氏も狭衣も、女君への今までにない気持ちに、自身でも驚いていることが描かれ、共に前世からの因縁であるとまで述べ、その執心さをうかがうことができる。

また、飛鳥井と浮舟は、恋に悩み入水するも、助けられ尼となる点が共通点である。飛鳥井においても、浮舟においても、入水は重要な局面であり、彼女たちのその後の運命を決定する行為であった。違いと言えば、浮舟は薫と匂宮の2人の男性との恋に悩み、それから逃れるべく入水したのに対し、飛鳥井は狭衣への愛を貫くために入水をしている。

とてもかくても、一方一方につけて、いとうたであることは出で来なん、わが身ひとつの亡くなりなんのみこそめやすからめ、昔は、懸想ずる人のありさまのいづれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身を投ぐるためしもありけれ、ながらへばかならずうきこと見えぬべき身の、亡くならんは何か惜しかるべき、（中略）ありながらもてそこなひ、人笑へなるさまにてさすらへむは、まさるもの思ひなるべし、など思ひなる。（浮舟・184頁）

・・・もし、命、心に叶はで長らへば、行く末に聞き合せさせたまひて、さてこそあんなれ、と聞こえたてまつらんも、いま少し心憂かりなんかし、などで、（中略）遠きほどまで行き着きて、このありさまを見扱はれぬ前に、ただいかにしても死ぬるわざもかなと思へば、かくて、五日になりぬれど、水などをだに取り寄せず。（巻1・141頁）

「自分がいなくなることが最善だ」とする浮舟と、「狭衣に今回の事を知られるのは、死ぬことよりも情けない」とする飛鳥井は、同じ入水であっても、心は異なっている。この違いは、類似した2人を区別する最大の特徴と言ってよいかもしれない。

では、これらの点がどのように『源氏狭衣歌合』へ反映されているのか、以降、歌の背景を探りながら検討してみたい。

II 『源氏狭衣歌合』における比較

1. 飛鳥井と夕顔

最初に、飛鳥井と夕顔の組み合わせから見てみよう。飛鳥井と夕顔の組み合わせは、夕顔の登場回数が少ないこともあり、1例のみである。

十二番

左 かくやは人のとのたまひし御かへり
やまのはの心もしらでゆく月はうはのそらにて **かけ** やたえなむ
右 みちのしるべをおもひしらばとまれとはいひてましとうらみさせ給ければ
とまれともえこそいはれぬあすかみにやどりとるべき **かけ** し見えねば⁷

まず、両歌には<かけ>という歌語が共通してあることがわかる。

そして、物語の内容に踏み込んでみると、まず左の『源氏物語』歌は、光源氏が夕顔を伴ってなにがしの院に行った際に、夕顔が詠んだ歌である。

そのわたり近きなにがしの院におはしまし着きて、預り召し出づるほど、D 荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾をきへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。A 「まだかやうなることをならはざりつるを、心づくしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしののめの道ならひたまへりや」とのたまふ。B 女恥おらひて、

「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ心細くて」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひの心ならんとC をかしく思す。（夕顔・159頁）

次に、右の『狭衣物語』歌は、仁和寺の威儀師に誘拐されそうになった飛鳥井を狭衣が助け、家に送り届ける最中に、飛鳥井が詠んだ歌である。前後の文章は以下ようになる。

・・・A 思し捨つるなよ。安達の真弓はいかが」とのたまふに、B いとど恥づかしくて、ただとく降りなどするをひかへて、「答へをだにしたまはぬ、かかる夜のしるべをうれしと思さましか

ば、かく暗きに泊れ、とはのたまひてまし。心憂」とて、許したまはねば、いとらうたく若びたる声にて、

D泊まれともえこそ言はれね飛鳥井に宿りとりべき蔭しなれば

と言うさま、Cなほさるべきにや、かやうのうちつけごとに泊るべき心はなきものを、この水影は見で止まんも口惜しう思されて・・・（巻1・82頁）

ここでポイントとなるのは、下線部のAからCへの流れである。問いかけに、恥じらいながら答える女君を見て、男君はさらに恋心を募らせる。その流れを、『源氏狭衣歌合』では、詞書で問いかけを示し、歌で女君のらうたげな様を表している。

また、下線部Dで示したように、粗末な仮伏の家という場面設定でも共通していることがわかる。

しかし、『源氏物語』は、夕顔の死、つまり2人の恋の終焉に向けて進んでいく場面であるのに対し、『狭衣物語』は、これから始まる2人の恋を描いており、全く逆の方向へ物語が進んでいることがわかる。

2. 飛鳥井と浮舟

次に、飛鳥井と浮舟の番である。飛鳥井と浮舟の組み合わせは6例ある。1例ずつ検討してみたい。

(1) 34番

三十四番

左 心ならずながらへてをのというところにすむころ月を見て 浮舟
我かくてうき世中にめぐるともたれかはしらむ月のみやこに
右 心よりほかなるふねのうちに身をかぎりにおもひなりけるに、わたるふな人か
ちをたえとか、せ給へりける御あふぎにかきそへける あすかみ
かちをたえいのちもたゆとしらせばやなみだのうみにしづむふな人

左の『源氏物語』歌は、薫と匂宮との板挟みの恋に悩み入水を決意した浮舟が、横川僧都に助けられ、月をみて半生を振り返り詠んだ歌である。

A月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひ出でつるさまさまの物語などするに、答ふべき方もなければ、つくづくとうちながめて、

われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに

今は限りと思ひはてしほどは、恋しき人多かりしかど、こと人々はさしも思ひ出でられず、ただ、
親いかにまどひたまひけん・・・（手習・302頁）

右の『狭衣物語』歌は、乳母に騙されて筑紫へ下る舟の中で、言い寄る男が狭衣の従者であったことを餞別の扇を見て知り、落胆する飛鳥井が詠んだ歌である。

移り香のなつかしさは、ただ袖うちかはしたまひたりし匂ひ変わらず、仮名など書きまぜられたるを、泣く泣く見れば、A渡る舟人楫を絶え、と返す返す書かれたるは、ことしもこそあれ、いかでかはいみじうおぼえさらん、顔を当てて、とばかり泣かるるさま、外までも流れ出でぬべし。

楫を絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人・・・（巻1・140頁）

物語中の2つの歌は、共に背景がみられる。下線部Aで示した箇所がそれにあたるが、『源氏物語』では『竹取物語』でかぐや姫が月を見て物思いにふけるシーンが、『狭衣物語』では曾根好忠の「ゆらのとをわたるふな人かちをたえ行へもしらぬ恋のみちかも」（『新古今和歌集』・恋 1・1071）⁸の歌が想起される。

両歌とも先行作品の影響が感じられる場面の歌として共通項があり、恋の懊悩から発した歌である点でも一致するが、浮舟が入水に踏み切った（未遂ではあったが）後であるのに対し、飛鳥井はまさにこれから入水しようとしている場面であり、2人の心情の面では大きな違いが感じられる。

(2) 59番

五十九番

左 をのにてAさまかへて うきふね
なきものに身をも人をも思ひつ、Bすて、しよをぞさらにすてつる
右 ときはにてかぎりなりければAさまかふとて あすかみ
おくれじとちぎらさりせばいまはとてBそむくもなにか、なしからまし

左の『源氏物語』の歌は、周囲の反対を押し切り出家を遂げた浮舟が、その翌日に心の慰めに詠んだ歌である。

そして、右の『狭衣物語』の歌は、『狭衣物語』後半部で登場する飛鳥井の絵日記に書かれていた歌であり、飛鳥井が出家する時に詠んだ歌である。

下線部AとBで示したように、出家をテーマとして詠んだ歌として共通している。しかし、浮舟が迷いを捨てようとしているのに対し、飛鳥井は狭衣への未練を抱えたままであることがわかる。

(3) 68 番

六十八番

左 心からこのよを_Aかぎりにおもひすてけるよ うきふね
かねのおとのたゆるひゞきにねをそへてわが世つきぬと_Bきみにつたえよ
右 ときはのやまごとにて_Aかぎりにおぼえければ あすかみ
ながらへてあらばあふよをまつべきにいのちはつきぬ_B人はとひこず

詞書中の下線部A「かぎり」が示すように、どちらも死に直面しての歌である。

左の『源氏物語』の歌は、愛に苦しむ浮舟が死を決意し、最後に詠んだ歌である。

限りと思ふ命のほどを知らでかく言ひつづけたまへるも、いと悲しと思ふ。 (中略)

誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを、つくづくと聞き臥したまふ。

鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへてわが世つきぬと君に伝えよ

持て来たるに書きつけて、「今宵はえ帰るまじ」と言えば、ものの枝に結びつけておきつ。(浮舟・195頁)

また、右の『狭衣物語』の歌は、前述の59番歌で述べた絵日記に記された歌で、命果てようとする飛鳥井が詠んだ歌である。

どちらも、下線部Bで示したように、誰かを思って詠んだ歌であるという点で共通しているが、その対象は大きく異なる。浮舟の歌にある「きみ」は浮舟の母を、飛鳥井の歌にある「人」は狭衣を指しており、二人の心の拠り所の違いが浮き彫りになっている。飛鳥井は絵日記という特質上、歌からしかその思いを読み取れないが、浮舟の母への思いは、本文中(下線部C)でも描かれている。

(4) 77 番

七十七番

左 をのにてゆきの降る日 うきふね
かきくらすのやまのゆきをながめつつ_Aふりにしことぞけふもかなしき
右 ときはにて あすかみ
なをたのむ_Bときはのもりのはきばしら_Aわすれなはてそくちはしぬとも

左の『源氏物語』歌は、出家して数か月過ぎた後、浮舟が過ぎし日を追懐して詠んだ歌である。

・・・「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひはてにたれど、なほそのをりなどのことは忘れず

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき
など、例の、慰めの手習を・・・（手習・354頁）

浮舟の思い出している「君にぞまどふ」と言った相手は、匂宮のことである。匂宮と浮舟が関係していた日々の中で、隠れ家で過ごした折に、匂宮が「峰の雪みぎはの氷踏みわけて君にぞまどふ道はまだはず」（浮舟巻）と詠んだのだ。

右の『狭衣物語』歌は、飛鳥井が生前身を置いていた寺で、狭衣のことを思って詠んだ歌である。

心苦しう思されける折の手まさぐりにや、臥しながら書きけりと見えて、下の方に、はかばかしうも見えぬさまにて、

なほ頼む常盤の森の真木柱忘れな果てそ朽ちはしぬとも
とあるにも、夢の面影さへ立ち添ひたる心地して、さらにえぞ思し醒さざりける。（巻3・143頁）

気分がすぐれない中でも、狭衣を思う飛鳥井の心が強く伝わってくる場面である。

思う相手がいて詠んだという点では一致しているが、下線部Aで示したように、その気持ちは正反対と言っても過言ではない。浮舟が匂宮を「思い出したくはない」と感じているのに対し、飛鳥井は狭衣に「忘れて欲しくない」と感じている。飛鳥井のその感情は、下線部Bの「ときわのもりのまきばしら」からもわかる。「常盤」は「春秋もしらぬときわの山ざとはすむ人さへや面がはりせぬ」（『新古今和歌集』雑中・1617・在原元方）などが示すように、季節が変わっても永遠に変わらないという印象があり、また「真木柱」も「常盤」の縁詞であり、太い様から、思いの強さを表しているとも考えられる。

同じように思い出す相手がいなながらも、その心は全く違った方向を向いているのが、この2首なのである。

(5) 91 番

九十一番

左	さまかふとて	うきふね
かぎり	とぞおもひなりにしよの中を _B かへすがへすもそむきぬるかな	
右	ふねのうちにて	あすかゐ
はや	きせのそこのみくづとなりきと _C あふぎの風にふきもつたへよ	

左の『源氏物語』歌は前出の 59 番歌に続いて詠まれた歌である。

亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄てつる
今は、かくて、限りつるぞかし」と書いても、なほ、みずからいとあはれと見たまふ。

限りとぞ思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな

A 同じ筋のことを、とかく書きすさびあたまへるに、中将の御文あり。（手習・341 頁）

右の『狭衣物語』歌は、狭衣への純愛を貫くために入水を決意した飛鳥井が、行為に及ぶ前に詠んだ数首の歌の最後のものである。

まして、我や忘るる、人や訪はぬ、と思ひしは、をこなりけり、と思ひ続け、立ちぬれば、涙の海に身はやがて動かれで（中略）この世にはまた、見たてまつるまじきぞかし、只今、かくなりぬとも、知りたまはで、いづくに、いかにしておはすらん、寝やしたまひぬらん、さりとて寝覚めには、おのづから思い出づらんと、いみじき心惑ひに、硯をせがいに取り出でつつ、この扇に物書かんとするに、目も涙にくれ、手もわななかるれど・・・（巻 1・151 頁）

『源氏物語』本文の下線部 A や『狭衣物語』の本文で示したように、浮舟も飛鳥井も、決意をしながらも、なお逡巡している様子がかがえる。ただし、浮舟のそれが「忘れたいのに忘れられない」というマイナスの方向であるのに対し、飛鳥井のそれは「いなくなるが忘れてほしくない」というプラスの方向をむいている。

「かへすがえす」世を背く（下線部 B）浮舟に対し、「扇の風に吹き伝え」て欲しい（下線部 C）飛鳥井は、同じく過去の自分を捨てようとはしていても、異なった立場であると言えよう。

(6) 92 番

九十二番

左 をのにてよをそむきて春

うきふね

そでふれし人こそ見えね花のかのそれかるとほふ春のあけぼの

右 ときはのかたへとてめのとのいぎなひけるに

あすかみ

かはらじといひししひしばまち見ばやときはのもりに秋や見ゆると

左の『源氏物語』の歌は、前述の 77 番歌に続けて、浮舟が詠んだ歌である。

閨のつま近き紅梅の色も香も変らぬを、A春や昔のと、こと花よりもこれに心寄せのあるは、B飽かざりし匂ひのしみけるにや。後夜に閑伽奉らせたまふ。下臈の尼のすこし若きがある召し出でて花折らすれば、かごとがましく散るに、いと匂ひ来れば、

袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけぼの（手習・356頁）

右の『狭衣物語』の歌は、乳母の策略で常盤（本来は筑紫であるが、飛鳥井は騙されていた）へと行く前に飛鳥井が詠んだ歌である。

C昔物語やうに、ことさらびてや思さん。かくとばかりは、聞こえさせたまつらばや、と思ふにも、

変わらじと言ひし椎柴待ち見ばや常盤の森にあきや見ゆると

Dとかへる山のとありし月影、この世の外になりぬとも、忘るべき心もせぬを（巻1・130頁）

それぞれの歌の本文の前後では、下線部A～Dに示した、引歌や物語からの典拠がみられる。

まず『源氏物語』の側では、下線部Aは、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」（『古今和歌集』・恋5・747・在原業平）⁹を、下線部Bは、「あかざりし君がにほひの恋しさに梅の花をぞけさは折りつる」（『拾遺和歌集』雑春・1005・具平親王）¹⁰を引き歌にしていると思われ、さらに『源氏狭衣歌合』に取られた歌自体も、「色よりもかこそあはれとおもほゆれたれが袖ふれしやどの梅ども」（『古今和歌集』春上・33・詠み人知らず）を本歌としている。

一方『狭衣物語』の側では、下線部Cは、『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め」で頭中将が話した常夏女の話の典拠としており、下線部Dは、「はしたかのとがへる山のしひしばのはがへはすともきみはかへせじ」（『拾遺和歌集』雑恋・1230・詠み人知らず）を引き歌にしている。また、『源氏狭衣歌合』に取られた歌自体も77番歌で述べたように、「常盤」や、常緑樹であり、不変の意として用いられる「椎柴」を使って作歌されており、こちらも『新古今和歌集』の在原元方の歌を意識していると考えてよいであろう。

このように、両歌ともそれぞれの本文において、引き歌や典拠が多用されており、非常に似た場面であることがわかる。

しかし、ここでもやはり浮舟は恋を捨てた歌であり、飛鳥井は恋に頼る歌で、心情としては反対であると言わざるを得ない。

3. 『源氏狭衣歌合』における特徴

以上の結果をまとめてみると、飛鳥井と夕顔は、その特徴であるところがなく、はかなげな

女性らしさが伺える場面から歌を選択しており、番えられるに足る歌であるかと思われる。夕顔がその物語の終息部分であり、飛鳥井は序盤であるという違いはあるが、それよりも情景描写の類似の方が際立っており、そこを要点として考えてよいであろう。

また、飛鳥井と浮舟についても、入水や出家に関わる歌が多く、やはりポイントを押さえていると言ってよい。さらに、2人の相違点である、〈入水の理由〉についても明確であり、飛鳥井は恋を守るために、浮舟は恋を捨てるために〈死〉を撰んでいることがそれぞれの番から伺える。

このように、『源氏狭衣歌合』においては、3者はある特定のイメージのもとに番えられていることがわかるが、ではこのようなイメージを抱くに至った経緯は何であろうか。

Ⅲ 新たな女性観

ここからは、『源氏狭衣歌合』における飛鳥井と夕顔・浮舟のイメージ意識を構成した理由について、『源氏物語』や『狭衣物語』と同時代に書かれた他の作品から考えてみたい。

『源氏物語』の愛好家であった菅原孝標女が書いた『更級日記』には次のような記述が見られる。

光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のようにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあきまし。 (299頁)¹¹

・・・「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのおはせむ 人を、年の一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくし据ゑられて、花、紅葉、月などをながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ、あらましごとにもおぼえけり。(314頁)

光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薰大将の宇治にかくし据ゑたまふべきもなき世なり。 (329頁)

下線を引いたように、作者が夕顔や浮舟に傾倒し、そのようになりたいと強く願っていることがわかる。『源氏物語』で一番輝いていた紫の上ではなく、浮舟や夕顔を挙げている点は、大変に興味深い。

また、時代は少し下るが、冒頭でもあげた、藤原俊成女の書いた『無名草子』にも夕顔と浮舟は次のように記されている。

夕顔こそ、いとほしけれ。母にも似ずいみじげなる女持ちたるぞ、その身の有様にはさらでもあ

りぬべき。かようならむ人は、ただあとかたもなくやみなむこそ、今少し憊び所もあらめ。(中略)手習の君¹²こそ、憎きものと言ひつべき人。さまざま身を一方ならず思ひ乱れて、
鐘の音の絶ゆる響きに音をそへてわが世尽きぬと君につたへよ
と詠みて、身を捨てたるこそいとほしけれ。兵部卿の宮の御事聞きつけて、薰大将、
波越ゆる頃とも知らず末の末待つらむとのみ思ひけるかな
と宣へるを、『所違へならむ』とて、結びながら返したるほどこそ心まさりすれ(32頁)

共に、<いとほしき人>という項目で挙げられ、浮舟は「憎い」とも評しながら、最後には肯定的な意見でまとめている。これらの作品から言えることは、平安時代後期頃から、夕顔と浮舟は支持を受ける対象となりえたということである。

さらに、『無名草子』では飛鳥井についても触れられている。

道芝、¹³いとあはれなり。『明日は淵瀬に』と言うより、
天の戸をやすらひにこそ出でしかとゆうつげ鳥よ問はば答えよ
など言ふほども。
早き瀬の底の水屑となりにきと扇の風の吹きもつたへよ
などあるも。また、常盤にての手習どもなども、いみじくあはれに、さばかりの人にさほどに思ひとめられけむほど、めでたきを、見出でられたるはじめ法師と乗り具したるほど、いと心憂くうとましきを、またのちの振舞さへこそ、心より外のことと言ひながら、人しもこそあれ、この君の御もとなる人にしも取り持ちて行かれたるほどは、あはれも醒めて口惜しき人の宿世なり。さりとならば、またしばしの命だにありて、志のほどをも見果てよかし。かたがた、いと口惜しき契りなりかし。(60頁)

狭衣との出会いなどで、「疎ましい」とは評されてはいるが、多くは同情の言葉であり、「あはれ」と評されている。夕顔や浮舟と類似した飛鳥井もまた、広く受け入れられるものであったと言えよう。事実、『狭衣物語』においてはヒロインである源氏の宮よりも飛鳥井の存在感は大きく、巻1で行方不明になるにも関わらず、人を介しての消息や、絵日記などで度々登場し、狭衣の心にあり続けるのだ。

このような女性観について、後藤祥子氏は『新編日本古典文学全集 狭衣物語①』の冒頭で次のように語っている。

新しい女性像といえば、飛鳥井の女君にとどめをさすであろう。(中略)女の入水譚としては、いささか理由が変わっている。女の入水譚は古代から数多いが、貴種の相手に操を立てて、卑下の男から逃れようとする意識が文学化されたのは珍しいのではあるまいか。(中略)まさしくこ

こには、一見夕顔のようにはかなげに見えながら、なりゆきに任せず、命をかけて貞操を守ろうとする、行動する女の片鱗が見て取れる。(7頁)

後藤氏の示す「新しい女性像」の背景にある、旧来の女性像というのがどのような女性を指すのか、一概には言えないが、竹村義一氏は『源氏物語女性像』(有精堂 1970年)の中で、『源氏物語』に登場する女性について、

第一に女というものの無力さが全面的に表れている。(中略)女であるがためにおのれを抑制しなければならない(181頁)

とし、また

女性は、単に男性のがわから言えば、一つの慰みの相手に過ぎなく、しかも女性としての制約から育てがいのないものであり、それでいて心配の種となる。すこぶる消極的な存在として取り扱われているのである。この二つの例が最もよく中古時代の人間の女性観を表していると考えられる・・・(182頁)

とも述べている。竹村氏の説に依るならば、『源氏物語』の女性は庇護されるものであるであろう。それが、後藤氏の言う「行動する女」の対極にあるものであり、夕顔のような女性であるのかもしれない。そしてそれは、飛鳥井とも共通するものである。ただ、飛鳥井は夕顔型だけで終わらず、独立した自我をも持っていた。それが、新たな女性像として世に認知されていたのかもしれない。

さらに筆者は、浮舟という人物も、その新たな女性像に当てはまるのではないかと考えている。確かに、薫と匂宮という2人の男性に翻弄され、入水しゆく様は、無力な女性としての行動であろう。であるが、その後助けられ、出家してからの浮舟はどうであろうか。『源氏狭衣歌合』中の歌にもあったように、過去のしがらみに心かき乱されながらも、それを立ち切ろうともがく浮舟は、弱いながらも行動する女の片鱗を見せているようにも感じる。従来の女性像を踏襲したような夕顔と、新たな女性像の走りとなる浮舟、そしてその2つを兼ねた新たな女性像の最たる飛鳥井。その3者の個性が時代と共鳴し、定家によって『源氏狭衣歌合』において、多く番えられた。そう推測するのは牽強ではないだろう。

おわりに

以上、『源氏狭衣歌合』における飛鳥井と夕顔・浮舟の番について、比較、検討してきた。

彼女たちの番は、類似すると言われる部分にポイントをあて、それに見合った歌が組み合わせられ

ていた。それでいて、類似性だけでなく、それぞれの人物の特徴も示しており、違いも浮き彫りになっている。飛鳥井と夕顔は、〈男君を惹きつける嫺やかさ〉をポイントとしながら、場面の進行具合を変えており、飛鳥井と浮舟は、〈入水〉にポイントを置きながら、その契機を「恋を捨てる」か「恋を守る」かという背反する立場で示していた。

また、それらの類似と相違は、平安時代後期から勃興した、自らの意思で生きる、新たな女性像とも関連しているとも考えられる。

藤原定家は、歌論書『近代秀歌』の中で、

ことばはふるきをしたひ、心はあたらしきを求め（102頁）¹⁴

と述べている。これは、歌だけに当てはまることではないだろう。『源氏物語』時代の窮屈な女から、より生き生きと行動する女へと変化しつつある女性を、定家は肯定する意味も含めて、『源氏狭衣歌合』で彼女たちの歌を多く選択したのかもしれない。

しかしそれらも、また異なる視点で見れば変わってくるかもしれない。今回触れられなかった、定家の和歌観を通して見る、飛鳥井と夕顔・浮舟の歌については、後の論稿に期したいと思う。

注

- ¹ 光源氏（『源氏狭衣歌合』中の表記では「六条院」）と狭衣（『源氏狭衣歌合』中の表記では「御製」）については、初出のみ表記され、以降は省略されている。
- ² 久曾神昇氏は『物語二百番歌合と研究』（竹本元暉・久曾神昇 未刊国文資料刊行会 1955年）において、「歌合として考察すれば、当時の歌人の新詠を番つたものではなく、所謂時代不同の歌合に属するものとならう。」としており、田淵句美子氏はそれを受けて、「『物語二百番歌合』の成立と構造」（『国語と国文学』2006年5月）の中で、「肯定すべき指摘であるが、三十六を単位とする歌仙歌合が、散逸書も含めて、長く、多数作られている流れの中で、『物語二百番歌合』には、歌仙歌合からの影響だけではなくて、新古今時代に流行した一連の自歌合からの影響も考えられるのではないか。西行、慈円、良経、定家、家隆たちの自歌合は、いずれも歌合という形を取りながら、実際は秀歌の撰集に近い性格を有する。」としている。
- ³ 『無名草子』の本文は、『新潮日本古典集成』に依った。以下、全て同じ。
- ⁴ 『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』に依った。以下、全て同じ。
- ⁵ 『狭衣物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』に依った。以下、全て同じ。
- ⁶ 『源氏狭衣歌合』の中で1番多い組み合わせは、光源氏と狭衣の28例である。
- ⁷ 『源氏狭衣歌合』の本文は、『物語二百番歌合の研究』に依った。以下、全て同じ。
- ⁸ 『新古今和歌集』の本文と通し番号は、『新編国家大観』に依った。以下、全て同じ。
なお、この好忠歌の五句は、『曾根好忠集』においては「恋のみちかな」となっている。
- ⁹ 『古今和歌集』の本文と通し番号は、『新編国家大観』に依った。
- ¹⁰ 『拾遺和歌集』の本文と通し番号は、『新編国家大観』に依った。以下、全て同じ。
- ¹¹ 『更級日記』の本文は、『新編日本古典文学全集』に依った。以下、全て同じ。
- ¹² 浮舟のことをさす。
- ¹³ 飛鳥井のことをさす。
- ¹⁴ 『近代秀歌』の本文は、「日本古典文学大系」に依った。